

聞き手＝板生 清（本誌監修）

なかた・ひろし  
1964年生まれ。横浜市出身。青山学院大学経済学部卒業後、松下政経塾(10期生)に入塾し、ゴミ問題の研究に没頭。93年に衆議院議員となり大蔵委員、運輸委員会委員、決算委員会理事、内閣委員などを歴任し、数多くの活動に従事した。02年、横浜市長選挙に初当選、現在に至る。著書に『21世紀日本の繁栄譜』、『いま首相公選を考える』、『おまえが言え。』など多数。



経済と環境の融合がテーマ

横浜では現在、環境問題、福祉問題、ゴミ問題など、さまざまな問題が山積みされているわけですが、中田さんが今一番力をいれて取り組んでいらっしゃるテーマについてお聞かせください。

中田——私が衆議院議員の頃から体系的に取り組みたいと思ってきたのが、経済活動と環境への取り組みを、どう社会の中で融合させるか、ということでした。その融合のなかで、いかに技術を引っ張りだして、社会のメカニズムを構築していくか、ということが政治家としての使命だろうというふうにつねづね考えています。

有り体な言い方ですが、このまま私たちの営み

を続けていけば地球環境は守れないでしょう。結果として、人間を含めた生命の運命に関わって行くことは必至です。海水温度の上昇や大気中のCO<sub>2</sub>やNO<sub>x</sub>の増加といった情報が毎日のように報じられることで、皆、薄々危機感や不安感を感じていることと思います。私は現在三八歳ですが、私のように四〇年弱しか生きていない者でも、子供の頃の夏の暑さと、大人になってからの夏の暑さはまったく異質なものだというふうに関身で感じています。子供の頃は、木陰に入れば涼しかったけれど、今は木陰に入っても熱風が吹いてきますからね。そうした体験と先ほどのような情報を統合すると、これは相当に危機感をもたなければならぬだろう、と思うわけです。

一方で、我々の現在の便利な生活や経済活動を

完全に捨てることは不可能です。仮に自分ひとりが便利な生活を捨てて昔の不便な生活を選んでも、社会全体がそうならない限り変わらない。しかし、単純に我々が昔に戻れるか、とさえいえば、そんなことは非現実的ですよね。そこで、経済活動と環境を融合させるための社会的なシステムを構築する、あるいはそうした技術を引っ張り出してくるということが、私は政治の役割だと考えるわけです。

——なるほど。そのお考えには非常に共感できますね。

中田——私が政治家になって一〇年が過ぎましたが、この間は失われた一〇年といわれるほど経済が落ち込んできました。逆にいうと、経済と環境の融合のなかにしか、日本経済の活路は見出せない

いとさえ思っています。私は一時期、環境のことをまったく無視して安い製品を作り続けて輸出していけば、やがて国際的には「環境ダンピング」であるとしてパッシングを受けるに違いないと思っていたんですよ。「環境ダンピング」というのは私が当時使っていた言葉です。かつて欧米が日本の経済力を脅威だと感じていた頃、やたらとダンピングという言葉が使われていましたが、その背景には、日本人は人権を無視して働きすぎて儲けている、ということに対する批判があったわけですよ。それと同じことが環境についても起こるだろうと予測したのです。幸が不幸か日本の経済が低迷したため、この考えは杞憂で終わりました。

いずれにせよ、日本は大変な技術力をもっているわけですから、環境に対して世界に喜ばれる、貢献できる技術を示していけば、工業国として今一度復活することができると信じています。だからこそ、日本の技術力には大いに期待しているのです。

### 一本貫くフィロソフィーをもつ

確かに、最近では製造から最終的には土に戻すまでのコストをトータルで考えるのが当たり前の時代になってきました。日本はそうした分野で技術力を大いに発揮すべきですよ。でも、そのことを一〇年前に予見されていたというのは先見の明がありますね。

中田さんは松下政経塾のご出身だそうです。政経塾にいた頃からグローバルに物事を考えら

れていたんですか？

中田——今から考えれば、その頃は体系的にその解決方法まで含めて考えていたわけじゃないですね。ただ、行政の長となって感じるのには、個別具体例に対する対応が求められるなかで、それらを貫く着眼点というか、シーズを得たのは、確かに松下政経塾だったというふうに思います。

——やはり、何事においても哲学とか信念をもっていないとダメなんでしょうね。現在の日本の課題は、優秀な人材をいかに育てるかなんですね。その一つが松下政経塾なのかもしれません。最近では、MOT (Management of Technology) といって、専門職大学院をつくるという動きもあります。なぜ、そうした動きが出てきたかというと、日本の技術は一流だけど、日本人はそれを最終的にビジネスに結びつける能力に欠けるためです。プロデューサーとしておカネとモノとヒトをうまく動かして、ソリューションをやっていくという人が非常に少ない。それをMOTで学ばせようという。

そうしたなかで、中田さんは若くして非常に優れたプロデューサーとしての手腕を発揮しておられるわけですが、ご自身が歩んできた道を振り返ってみて、何が重要だったと思われませんか？

中田——やはり、一本貫くフィロソフィーでしょうね。物事を解決するときも、軸はつねにぶれないですね。

私は市長になってから、「民の力が存分に発揮される社会」をテーマにしてきました。ここでいう「民」というのは、民間企業であり、市民

であり、NPOなどの市民団体であり、ボランティア活動をしている任意団体であり、趣味のサークルであり、それらすべてを一括りにしたもので、そうしたすべての人たちが目標に向かって活発に活動することを目指しています。活動にはNPO等の公益活動だけでなく、個人の趣味活動や、会社の利益追求のための活動も含まれます。法の下に会社や個人が利益の追求をしたっていいじゃないですか。利益追求ができるというのは、逆にいえば、お客さんの、社会のニーズを満たしている証拠です。それこそ、きわめて広い意味での公益活動だというふうに、私は考えているのです。

——それはよくわかります。そのお考えには大賛成ですね。

中田——「民」の活動が活発に展開されるということは、一言で言えば「自己実現」がなされているということなんです。会社の、個人の、団体の、それぞれの目標があつて、皆、その実現のために活動している。横浜というフィールドのなかで、それが活発に展開されるために、自治体としては環境を整備し、応援する。これが横浜市役所の徹すべき仕事なんです。そういう視点で見ると、経済対策も福祉も環境対策も一本の筋が見えてきます。たとえば、緑地の手入れにしても、これまでは地主さんが管理していましたが、手入れしきれなくて荒れていました。これからは、市民のなかでやりたいという人を募って活動に結び付けていくことが大事です。横浜市の一貫した姿勢は、民の活動を応援していくことなんです。

というわけで、先ほどの話に戻りますが、ぶれない軸をもつということが重要なんです。何か物事を解決する場合には、最上位概念を定義して、そのフィロソフィーに照らし合わせてすべてを整理するという方法を私は大切にしています。

——そういう姿勢をもっていると、あらゆる事柄に対して、整合性のとれた正しい判断が瞬時にできるわけですね。

**中田**——そうですね。瞬時とまではいなくても、人の顔色を見て何かを決めたりはしないですよ。それを始めると、政治というものがぶれてきて、結果として多くの市民が不平等感を感じたり、不公平に感じたりするようになってしまおうでしょうね。

### リーダーシップとは何か

——そういうプリンシプルをもつ人が最近は少なくなっているような気がしますね。

**中田**——右肩上がりだった時代は、ある意味では自分のことに集中していても公益性は保たれていたんです。公益のみを考える人を特別な存在として置く余裕が社会のなかにあったんですね。ところが不景気になってみると、本当に自分のことしか考えなくなってしまった。皆、内向きの思考回路になってきて、公益性は後回しという具合になってきている。これはもう、犯罪の増加などでも顕著です。私はすべての事柄には必ず循環があると思うのですが、社会の循環ということを考えた場合、何か転機があれば、循

環の仕方も変わっていくはずですよ。その転機に横浜がなれたらというふうに思います。

地球環境にしても、自分一代でこの地球を食い尽くしてもいいと考えている人なんて稀有ですよ。皆、漠然と不安に思っているんです。しかし、ひとりひとりが日頃から意識し行動しているかというところでもない。暑い夏はクーラーを入れて過ごすなどしている。

——電気をガンガン使いながらボヤいてるわけですね。

**中田**——それがまた、「合成の誤謬」とでもいうのでしょうか、社会全体にとってはマイナスになっていくわけです。

ゴミ問題もそうです。もはやゴミを出すということは、生活とイコールなんです。いざゴミを減らそうと思っても、行動できる人は一握りで、その一握りの人にも限界がある。スーパーに行って、発泡スチロールのトレイはいらないから魚だけ持って帰れるかというところ、そんなことできないですよ。でも皆、潜在的な意識はあるんです。その潜在的な意識をどうやって掘り起こし、解決に向けたしくみをつくるかだと、私は思っています。横浜も平成二二年度までに市全体で三〇パーセントのゴミを減らすべく、「横浜G30プラン」を推進し、ゴミの二〇分別、一五品目に取り組もうとしているところですよ。それができなければ、六〇〇億円かけて焼却工場を新たにつくらなければならない。どこに受け入れる場所がありますか？ なければやるしかないんですよ。私は達成できる数字だと確信しています。目標を設定して、あらゆる具体策

を当てはめていなければ、もはや環境問題を解決することはできません。

——目標を決めて、それを実行に移す。まさに今こそ、リーダーシップが求められていますね。

**中田**——目標を掲げるだけのリーダーシップはあり得ないですからね。どうやって具体的にマネジメントするかですね。だからこそ、フィロソフィーだけはきちんともっていないとダメなんです。

——そういうフィロソフィーをもった人が政治を行政を、そして日本を変えていくのだと思います。今日はすっかり中田さんのファンになりました。今後のご活躍を期待しています。



横浜G30プランにおけるごみ排出量削減に向けた取り組み